寒門先生安樂傳受 中

ロ 9
3898
2

早稲田大學圖書館
昭和27.6.25受
藏書

早稲田
9
3898
巻
2

壽斎先生安樂傳授中之巻

早稲田大學藏書

○わがせまきはきてはけ氣安有ゝ我なぐらふをおもりて。如何
してなりともおさんと堪忍の責をかゝる教訓本いろく
を見よせて見まゝてもせまれつきいを非をなくゝ口ふ如きてい
股ゞを肝癪は抑る併し跡を先まを滅や一胴の
如くよそ外をを見まるふ私ゞ身のとゞめる若しきの金を
拾ひ人賞く家おゞく成く安楽ふる。他受れいゞ
沛をくぬるゞし

○傳授先生曰夏のもの炎ふ入ぬるゆたるの火一
つまりぶ。あひさうに夏の雲ハ火をば大きゝ雲ぞ。
ゆゑ不ぞやあんに和ぞやゝ抜ぬ。丸の中で月を失ふ也。
其又夏は出すりぶよりぶ。出手の者つ半後ナゼゝ
ゝやまゝ緩まを緩も肝ゝ癪と肝癪ゝ云ふ。ぶ
大きゝ火ゝよく気ぞ。大中く丸で遠ゝ同じの潔ふ
異は紅なる。多かゝ義ゝ意ゝこの代ふ万象ゝ入ぬ
しゝ。出癪ふ肝ゝ二ゝ刻ゝ強い肝ゝ癪持ぬ。

○癪持ぬ

癪ゝ癪の見ぬる故ふいるゆまてゆんゆゝ治
ゆひぬゝ。彼百ゝ合ゝ私ある時ゝ義
の肉ゝ。自身ゝ為ゝ居る癪。ゝ義は癪ゝ
ゝ。我色をゆけの故ゝ我出ゝ。ゝ出ぬ。
癪を引ゝ。ゝ我ゝ例の肝癪後ゝ。ふゝ
せゝ。あの。あの下男は千助ゝ。
第。下男のゝ。癪持ぬる仕方ゝ。ゝ仕ゝ
ゝ。ゝ出ゝ。ゝ出ぬ。

ち藏の助を大小切り。声あらく者男〻を〻来れよ来き
くぶさもふくさげあるまはけ数我れを人いまあ〻通下男
の外と云て。かるれれよ助づ。そはま〻そ〻ぎ〻れ家
孫〻れおしめふ打擲を〻〻勝させん〻。やりあふ棒を
えつさげ〻。目にをの見せんこち元の和く死出。地の人の
ちふみびも。下男れふ助ふあ〻ど〻〻。我れ主人
なりそふ。やりど持とう〻ろく投捨て手伏〻。ろ〻を
汗ふなぐ〻びなる。こを思はぬ手く狼気皆

手過ぬく。下男れふ人命をすて〻も堪忍が
なりかこうやに。あれの主人なる乱行横暴失て。
実あ〻侍ぶさ〻ふ。こまるを誅ふ人合点ぶ。
ひんをや〻狼気ふむをつきふをなのるを。実〻気疲
ひをせ〻ひんそ後ぬ〻びひんを〻狼手出ぶ。
か〻〻を〻ぶいを〻ぬ世方を場の気疲れぬく。人れをろハ
かりけをのひくぶんを手に限〻ぎ第手〻を気疲
をりや何ひをひんにんのあ〻ぬをハ出いをのく世中ふ生

ばかりくさくさしきものなり。我身のうへふかくのする
わざ。たとへば紅白いなるまでもおれも世もりく芸術一つで
うるくしきめ出来いかいそのじや。特の花柳を進出を奮い
あるくくまてくるなるを。現在人生奮活者はしふかとちくく
ものまねごこまこい奮活じやや。仲れたあじやく芸術を主だ
ばかりこくくらまるそのじや。まこ同じ奮活おれ一大
すくそこのくくこのくくまるおもちるをつくるもて
やし数やたまくくあるくあるこうり同じ脊中ばおれ

そくさくぐたらすすくくやりくなるまでも名前ここ一大が
まくくらまぬいどこじやこれもこけくくあるこいふ芸術が
おいぶうじ。同じ奮ちまでぐまいくくくまぬなるこれも姫ふ
芸術をくく。何系どのばこ奮いぐこ一大名前ここ
や脊中をおちるくくあこくくおくくぬ
楽用きまは。ばかりこはいくくあるぐふ
らくくこのあるをさくく絵物でば半もりいれ芸術いる
をくるまこ。こまてみくくやくくぬも合点ここ人の芸術いる

いろ〳〵百事憎みの中なれども。ちらくらまこぬ事も
ないのぢや。さて何ぞ何ぞ。ぢん三や持ふくも。ろぐ書を
志かるふ。惜いことをそろ。迎かけて行をせまい。
又あるあれこく何もせよ。ろぐもあちらを抜ぐたんてぬき
くぐきも仕やせまい。れい鳥ぢやこまを道をぢや学庶
して居まいこそたらこもかんまゆく。出あでないつまき
先年宮本武蔵山をこす時。花の枝やかぐ
ひきがいかけあるふ。ぢんにん寝ぢや。寝ぢや。寝抱

銀ぢやで。精気抜きぢや。学庶が大ゆこや学庶が
大事ぢやせ。一人識ふいるせ。なり識なく人の
ぢんぢんと。ぢんぢんと。ぢんぢんと学庶のふく。精気抜
気でしりまるせ。ぢんぢんもの数をちぐず猿を
精気ぢんぢやくんのくぐ気迷きまていうるぢん
ぢやく精気ものふくも。御ぢ我様や我国ぢや抜のぢ
ちくくまくも気味まくぢ。おまんでいぢんさく肝癪も
精気も出せあものの。御せあ笠ぢや学庶がて

有く。御こ侍様やおそのひとふを通ふら。疝きまるゆかは
出さるきぬをそ通く。ゆ癪をしくゆる所なり。赤我うち四
間下やおくろやをそのみい疝気打癪を出し。百兵衛
くまで。見を通く。ゆ癪ぐしくあるゆへ。ふりべ。れを
腹ぶたいなり。又通く。答兵衛。我おが肝癪ハけきつき
なりあぐ。ゆ癪しくゆる所ふいつう打癪ぐ治くぬ。じまれ
つきふ。ひんをく疝きまぐあるぐ。きやその治おい御こ儀様
ゆくふ。ゆぬでなるふ。実ハけるきつきくいつをのふ伺おそを

間ぐ。ゆくを。貢間ふ貢間ふけきぬ治きゆく。御伺ぐを
間ふあくを。勝掠ふ獲ぬけるぐ。じまれ有ゆ。御こ儀まを
ゆたぐ。見ゆるくをを実のむ通きを治をそ仕ゆるの。
ひんをく疝気。みが気治きまふゆ癪ふくぷ治ゆ
家をなるぐ。ゆを第一費ハゆをさやるきば。ゆを今より治
ぬく。ふの疝きをひんをくふぐでものくぐを治きゆやふ
をのなるを。ゆ癪をきいるゆ。ふ今ふを疝気をなる
りのるを又肝癪気を治すふ伺ふもるき動わる。

むかしの人は六合くらく。何ものも腹をたてもせず。
悪しき男なりけるを。世の人笑ひ嘲りかの人の六合に
なげる。彼の法六助ぐ。この六助の美者ども。はまりく六助が
堪忍強き。世の人ぐ。ふ笑ふをそしり。扱悪くそひ
く。六合をおまへ。せんや。或日同じ。五十人ばかり打寄
ひ合せく。六助が先へ。ぬるまく。腹をつまり。撫り
ぬと。強く望む。六合が頭をこそ人寄く十ばかりを
くめくこくませ六助の。のたうちまく。行過くるまで。

先よりく。此人ども。ぬるを人かくるく。五十を撫る事
いつく六助の。新宅見てまたくはなけるを。
尋ぬる。納めるて六助。ふくきみくとみるく
うるく。教ぬぎるるく。打撫しけふ六助。
まて。共しも。ぬまるる通。なく。業。
さしその○中人。ぬ。尋ぬ。人うい。まくふ。
扱もく六助。食。ぬ。扱いるる。御あやまく。ぬ。
かんかんをせくるや。打撫ふあふくてもいつや十八。

もなるべきが。新合ふ〳〵ふ者を拵へ。五六百もたく
さつ〳〵んあ廿も新合を発す。ひんあん〳〵て者藤なるら
ん。四人百業〳〵ふんくを宝あく者御あるるる。此
よう我〳〵罪と為て。明〳〵ふひんあんの仕事を義ひと
平伏〳〵。為ひるきど〇六助ひ〳〵。笑ひなど答て
曰何も明あんきるたもつうき代接もいらず。我ふ〳〵ふい
ま六百もひゆうきて。塩ふするタツタ一ッつ〳〵ちり
いひ〳〵ふそ。西堂系も銭賊〳〵て曰ふ六て言さやる

ゆ〳〵〳〵者ふを没あけるく誠ふ六助の言葉ふ
有かき学病ふ〳〵だひ百ふ塩ふ丸ふ〳〵ふ
こてもひ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ

ゐやくるしう。ものいふ事。かんあんし。昼かんきゆうに紀
ぶく。食いもの。ふくりんけんし。甚はなはだ。ふかんけんして往
義あり。之地を考ふるものゝ。ずあり。ちさとつまもも
ぶ義角。かうりも茶を乃うぬふ。己ごろ。ろくこつ。ぶう
ゐ。水ごせきあて。先家。ふかうしゃ。はるもおろしゃ。
さのふもごうぞや。今日もごしゃ。色けりハ嬉ぶうらぬ
あまこバ。ふまいまゐあこ。ぬうしゃかうぞや。かうしゃう
しゃ。ハアスうしうしうし。己う嬉ふ。ふ。ばまうし。絶

ふいやけのかんハぶくくくくくもあやまるいあく
ゐろうるゆるうぞや。こうけそ。ゆりを人ぶ。こ。ぶ。
肝こ。嬉。絶。ふみか。己。ぶ。氣。嬉。ゐ。ぶ。して。ゐ。ふ。ゐ。
なゝぬ。ふ。ゐ。嬉。ふ。ゐ。ぶ。ふ。ゐ。ぶ。ふ。ゐ。ぶ。ふ。安楽の伝授。秘。ふ。の
肝。ゐ。ぶ。ゐ。

安楽の傳授ふゐゐゐなるゐ
たゝゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ自ゐゐば苦しむ

○先生曰次い進じや。日がみづ石の上に出てきて

○ハイ〳〵ごもれ先生なさまはせさの濤らい海まで

元年七千家ふなりまもなくこれうら先伺ひ出金

い〳〵ちりとも高ちきく伺ひ〳〵ぶくさうろ

和〳〵そのうち嫁女中あり〳〵朝夕遊筆乃仕法ぐ香

ふ〳〵掏ものの年をこぐ。何も孔ぐ志まふぐ

まーるめと。時ぐいありひまさまで。おまもむふの

見くめ和めく色くさぐ若ちまを。洗まろの

若〳〵ち拔ひ〳〵和ひ〳〵。伺と我〳〵孔ぐうろゆ〳〵

さきうと。教〳〵。高年〳〵ぬりる毒

○先生言くいく。せを志ちんぱらんそ孔さ和ちん。

せ孔拔事ハ家紀和ふ〳〵。中り云白丸及ぱぬ和ぐや。

先〳〵濤乃見ちいる孔年西ちぐ。伺西でこぐそ

○ハイ〳〵山色濤ぐ在示。ハいまうち和ふあるろて。

和列の和ふ郷ぐこぐ孔まを

○先生ちいく。義も通自丹列〳〵付ハな　和。此

門口を東へ行。こ条通をすみすじにひがし〳〵
ゆく。行あたる。江戸
○波の口こまかく先生さまのふ。ほのかれこふ東関
こんぎうぐうり　きどやぐう　ひがし〳〵　江戸
三条西へ江戸御宮小路。
こうひとりゆき丹波くゆきませぬ丹波くゆふい
なかの山にをすみすじに西へ行く桂川にて舟渡
ばそをきがをぐふ丹波乃ふて西へ
丹波へ行まする。江戸へゆくなら東海道丹波へ行く

なら丹波口より丹波へ行のくるまにてうごかすまく其乃
こさんゆけば。雪未つまゆ雪まするとこ乃へ
くらをあけませぬ丹波へゆくふこ条西洞院へ行てふ
伺ぐ丹波へ行ん方初未代丹波へ行ませぬ
○先生の口成ぐ。丹波へ行ふ江戸へ行道へ出てふ丹
波へゆ雪ず江戸へ出うと切りふて丹波へ行そてあくい
いけいいつまで。江戸へ行きあとのふるれ書訓九和
せを。先まへ丹波へ行つきあくこれるの事ぐ乃で

うつゆ、えんもきまく、ごだるおぐもおい地ちゃ
たぐ、をまじゃ、うぐいきゆんな

○渡ゆ、ぐうきく、日れいを年まき川い伝人者それでも
地獄へ行きを

○先ず鍋く白眼で日味噌の味噌くさいぬこうの
味噌の湯ふかうを眼眼くさんで指を指ぐすきれ
伝人者ゆんで伝人えんや。渡くゆふ渡ゆのの
そこ知ぐまいかゆ渡く行えんふてもひくとあと

つず。又をこ通くゆきとゆぐうふ
すぐたうぐを何のをその乃くおさんきまぐ天狗を
ふ妻ひう。めもくふハ極楽く行えれゆきの。
今その者ゆけ。乃ハ極楽く方角を
乃をゆ行く胡麻の郷を行を。ゆをば鐘
ゆうふ刻後ちまふく。ゆうえ地獄くだもり。
麦は稗ゆ麦ゆでけば。瓜の蔓ハおすびきゆうを。
ゆ行く稗ゆけば地ぐくゆる芝の種まきゆ。極らく

世間積善の家ふ餘慶あり。積不善の家ふ餘
殃なり。むかし或法度者ありき。聖人ふ問ひ
給ふ。地獄極楽をいかゞ。○聖人こたへて
君ふ聞きたまへ。なんぞ地獄極楽をたゞんや。白ふ
清侯大ふ怒の面色あらはれて。○聖人法俤
の手ふ怒る新を指さゝくそれ。地獄なれと
ふ。しまふ○法俤大ふ驚ろきて。地獄なれと
ゆゑ○聖人まこと法俤の恐び

ふ新を。指さゝくそれ。極楽なるまこと。
ゆゑ。こゝをやこゝまこと蓮の花さく。
丹波の国ふ行ふ。ふ法俤道。極楽ふ往くべ。極楽
道ふ。家和ふ孝ふ忠ふ善ふ。信ふ。
立偏和合ふ。人をゆゝしいつゝ。人
とそ○まこと情気せず。万年後と毒すそ。
極楽乃命ふ。やでも。造作ふ事
安楽浄土。幸者ふ。往ゝ。地獄

ばくばくとして物をいはず。其道にあらざる物を知らざるが
ごとく。僧侶の論を聞て和合せざる姿は忠信を嫉妬
し。邪曲を好む邪僻の石志石孝と
遊び好神や仏をそしるまで聖賢の教を信ず。
家業を怠り本合齋騎奢人ふ法をくるしむ
人をば清貧中言。影にのみ妻姑兄弟親子主
家業朋友和合いとさめ。見て地獄の苦道あて。
さのみならず地獄をたりしやうだ見ぬほど
此地獄を我を堪不和合ずふ地獄と知りめされ。
そるるも果て。極らく浄土をば
しんじつ実に。地と生るくやうにあるまじ。
うつるそのごとく影法師よりくがんばれ我をぞくし
おのおのおのくこれをうるあさうりく霊魂
まる姿もあるまい。よりあるくもに山青月のけ
法門わくてご清水あい後乃かをを
あらむでなるこのぞ小ふくるくぶのけ

笑ひまゝ。まつ山あがくるを始りあぞうを殘のかけも
ゑとあり。あげる。世方が丁寧に丁寧に丁寧に丁寧に
物ものぐるまをたうくること。おれが。まあくうるく先ふを
ないるまて。惟く我あ。あうるまを　我ときふ人の
あきがらぶこそ人はあきをつのの紅葉。
山こゝは紫の色うく合うく。紫和歌屋まるを
はゝめ。はゝうこゝもゝ。たてゝもゝ
後うたてらまあ。腹がくねんあ。ぶあけまば

身を勢の里。鳴がぶりやあるあるる。家の
おさあ母や。一新一つまひく。雪極楽でくすす
ぎやおいう。あの極うくぶ出ざまば百万ぶの絵や
長佛まゝも来長は極うくうぶ。この
さ埋をつきまくく。まあ来の事はくまりく。
まぶくぶこそいであのあ用和合の安楽浄ちく
ふくあがず。ずに我ふが安乗佛。後じやちぶ
くまぶ。波あこれ鳴ぶ後ぶ。ぶこ乗来まま

極楽は是非往くべしこの世にて
人と和合し心やすかるべし

安楽秘伝和讃八ヶ条
世間なれば修理をつとめ

賣卜先生安楽傳授中之巻終